

S O A I U n i v e r s i t y

Syllabus

講義要綱

令和元年度(2019)

相愛大学

講義要綱の見方

巻頭の2019年度授業科目一覧で自分の回生の配当科目を確認し、
インデックス番号で履修する授業科目をさがして講義要綱をよく読むこと。

インデックス番号



例)

1-001

ナンバリング	CC100A01	期間	前期
授業科目名	建学の精神/當相敬愛と浄土真宗 I		
英訳科目名	The Philosophy of Soai University (Shin Buddhism) /The Philosophy of Soai University within the Shin Buddhism I		
担当教員名	中平 了悟		
ディプロマ・ポリシー1		ディプロマ・ポリシー2	○
ディプロマ・ポリシー3	○	ディプロマ・ポリシー4	◎
ディプロマ・ポリシー5		ディプロマ・ポリシー6	
授業概要・ポイント	<p>相愛大学の名称は、大乘仏教経典『仏説無量寿経』に述べられている「當相敬愛」から命名されました。「お互いに敬い慈しみあう」という意味です。この大乘仏教の精神こそ、相愛大学「建学の精神」です。</p> <p>さらに、建学の精神には「浄土真宗の精神に基づく教育により、有為な人材を育成することを目的とする」と述べられています。つまり、本講義では大乘仏教の思想と浄土真宗の精神を学ぶことで、相愛大学生としての基盤形成を目指します。</p> <p>本講義を通して、人間を深く見つめ直し、相愛大学生の自覚を涵養しましょう。</p> <p>また、この講義では月一回の「定例礼拝」をはじめ、宗教行事への参加を評価対象としています。この点はよく自覚してください。</p>		
到達目標	<p>本講義と宗教行事への参加を通して、「宗教」というものを知ることから始まり、人類の叡智の結晶である「仏教」の基礎を学ぶ。</p> <p>「大乘仏教」「日本仏教」、そして「浄土真宗」へと展開する道筋をたどっていき、本学の「建学の精神」を十分に理解できるようになる。</p>		
授業計画	<p>第1回 相愛大学で学ぶということについて</p> <p>第2回 人間と宗教 (1) 基礎</p> <p>第3回 人間と宗教 (2) 発展</p> <p>第4回 仏教を学ぶ：ブッダの生涯</p> <p>第5回 仏教を学ぶ：仏教思想の基盤</p> <p>第6回 仏教を学ぶ：大乘仏教への展開</p> <p>第7回 大乘仏教を学ぶ (1) 基礎</p> <p>第8回 大乘仏教を学ぶ (2) 発展</p> <p>第9回 親鸞聖人の教え</p> <p>第10回 浄土真宗を学ぶ (1) 基礎</p> <p>第11回 浄土真宗を学ぶ (2) 発展</p> <p>第12回 日本文化について考える</p> <p>第13回 相愛大学の歴史と精神</p> <p>第14回 相愛大学「建学の精神」について考える</p> <p>第15回 まとめ</p>		
評価方法 (合計100%)	講義への参加態度 (参加状況) ・宗教行事への参加 55% 試験・レポート・課題・提出物 45%		
失格条件	3分の1以上欠席した場合、失格とする。		
予習・復習の準備 学習などのアド バイス	<ul style="list-style-type: none"> ・授業時間外における予習・復習等のアドバイス 身の周りの「宗教的なもの」を観察してみよう。 一度、仏教の本を読んでみよう。 大学の宗教行事に参加して、自分自身を見つめてみよう。 ・授業時間外における予習・復習等に必要時間 講義で紹介する文献や仏教教義・宗教思想に関する参考文献を読む…予習 2時間 (90分) 講義で取り上げた問題や仏教教義・宗教思想について整理する………復習 2時間 (90分) 		
課題へのフィード バック	講義内容や宗教行事に関して提出した課題については、必要に応じて個別もしくは全体にコメントします。		
教科書	原則として指定しない。		
著者名			
出版社			
参考書			
その他	月に一度の「定例礼拝」へ出席し、レポートを提出した者は、適宜評価する。		
備考	僧侶としての実務経験をもとに、この授業を進めます。		
科目生への開講	あり		

目 次

◎授業科目一覽

2019年度 授業科目一覽	p.3
---------------	-----

◎講義要綱

1. 基礎科目・共通科目	p.47
2. 音楽学部 共通専門科目	p.141
3. 音楽学部 専門科目	p.285
4. 人文学部	p.621
5. 人間発達学部	p.841
6. 教職課程科目	p.1067
7. 図書館司書課程科目	p.1111
8. 留学生科目	p.1137
9. 専攻科目	p.1157
10. 大学院	p.1179

Index	配当 年次	2016 2016(H28)年度入学生 Ⅳ回生用	2017 2017(H29)年度入学生 Ⅲ回生用	2018 2018(H30)年度入学生 Ⅱ回生用	2019 2019(H31)年度入学生 Ⅰ回生用	区分	2019(H31)年度 担当者	H31 科目生
7-023	Ⅳ 司	図書館情報資源特論				前期	岡田 大輔	E
7-024				司 学校教育概論	司 学校教育概論	前期	岡田 大輔	

8. 留学生科目

Index	配当 年次	2016 2016(H28)年度入学生 Ⅳ回生用	2017 2017(H29)年度入学生 Ⅲ回生用	2018 2018(H30)年度入学生 Ⅱ回生用	2019 2019(H31)年度入学生 Ⅰ回生用	区分	2019(H31)年度 担当者	H31 科目生
8-001	Ⅰ 共	日本語会話A	日本語会話A	日本語会話A	日本語会話A	前期	高谷 由貴・谷川 和子	
8-002	Ⅰ 共	日本語会話A	日本語会話A	日本語会話A	日本語会話A	前期	高谷 由貴・谷川 和子	
8-003	Ⅰ 共	日本語会話A	日本語会話A	日本語会話A	日本語会話A	前期	菅 翔子・嶋本 圭子	
8-004				日本語会話A	日本語会話A	前期	速水 はるみ・福田 一也	
8-005	Ⅰ 共	日本語会話B	日本語会話B	日本語会話B	日本語会話B	後期	高谷 由貴・谷川 和子	
8-006	Ⅰ 共	日本語会話B	日本語会話B	日本語会話B	日本語会話B	後期	高谷 由貴・谷川 和子	
8-007	Ⅰ 共	日本語会話B	日本語会話B	日本語会話B	日本語会話B	後期	菅 翔子・嶋本 圭子	
8-008				日本語会話B	日本語会話B	後期	速水 はるみ・福田 一也	
8-009	Ⅰ 共	日本語A	日本語A	日本語A	日本語A	前期	菅 翔子・嶋本 圭子	
8-010	Ⅰ 共	日本語A	日本語A	日本語A	日本語A	前期	菅 翔子・嶋本 圭子	
8-011				日本語A	日本語A	前期	高谷 由貴・谷川 和子	
8-012				日本語A	日本語A	前期	速水 はるみ・福田 一也	
8-013	Ⅰ 共	日本語B	日本語B	日本語B	日本語B	後期	菅 翔子・嶋本 圭子	
8-014	Ⅰ 共	日本語B	日本語B	日本語B	日本語B	後期	菅 翔子・嶋本 圭子	
8-015	Ⅰ 共	日本語B	日本語B	日本語B	日本語B	後期	高谷 由貴・谷川 和子	
8-016				日本語B	日本語B	後期	速水 はるみ・福田 一也	
8-017				日本語C		前期	福田 一也	
8-018				日本語D		後期	福田 一也	

9. 専攻科目

Index	配当 年次	2016 2016(H28)年度入学生 Ⅳ回生用	2017 2017(H29)年度入学生 Ⅲ回生用	2018 2018(H30)年度入学生 Ⅱ回生用	2019 2019(H31)年度入学生 Ⅰ回生用	区分	2019(H31)年度 担当者	H31 科目生
9-001					専攻実技A(声楽)	通年	<声楽部門>	
9-002					専攻実技B(声楽)	通年	<声楽部門>	
9-003					専攻実技A(管弦打楽器)	通年	<管弦打部門>	

index	配当 年次	2016 (H28) 年度 Ⅳ回生用	2016 (H28) 年度 Ⅳ回生用	2017 (H29) 年度 Ⅱ回生用	2017 (H29) 年度 Ⅱ回生用	2018	2018 (H30) 年度 Ⅱ回生用	2018 (H30) 年度 Ⅱ回生用	2019	2019 (H31) 年度 Ⅰ回生用	区分	2019(H31)年度 担当者	H31 科目生
9-004									専	専攻実技B(管弦打楽器)	通年	<管弦打部門>	
9-005									専	修了演奏(声楽・器楽)	集中	教務主任(松本 直祐樹)	
9-006									専	特殊研究Ⅲ	通年	黒坂 俊昭	
9-007									専	作品研究	通年	三鬼 尚味	
9-008									専	演奏解釈	通年	中谷 満+泉 貴子+稲垣 聡 +松本 直祐樹	
9-009									専	西洋音楽史特殊講義A	前期	村井 晶子	
9-010									専	西洋音楽史特殊講義B	後期	村井 晶子	
9-011									専	台奏	通年	(管弦打部門)	
9-012									専	室内楽	通年	(ピアノ・管弦打部門)	
9-013									専	オペラ演習	通年	泉 貴子	
9-014									専	通奏低音	通年	青木 好美	
9-015									専	室内楽演習	通年	柏木 玲子	
9-016									専	オーケストラ特別研究A	通年集中	(管弦打部門)	
9-017									専	オーケストラ特別研究B	通年集中	(管弦打部門)	
9-018									専	オーケストラ特別実習A	通年集中	(管弦打部門)	
9-019									専	オーケストラ特別実習B	通年集中	(管弦打部門)	

10. 大学院

index	配当 年次	2016 (H28) 年度 Ⅳ回生用	2016 (H28) 年度 Ⅳ回生用	2017 (H29) 年度 Ⅱ回生用	2017 (H29) 年度 Ⅱ回生用	2018	2018 (H30) 年度 Ⅱ回生用	2018 (H30) 年度 Ⅱ回生用	2019	2019 (H31) 年度 Ⅰ回生用	区分	2019(H31)年度 担当者	H31 科目生
10-001						修Ⅰ	西洋芸術音楽総合演習Ⅰ	西洋芸術音楽総合演習Ⅰ	修Ⅰ	西洋芸術音楽総合演習Ⅰ	前期	黒坂 俊昭・泉 貴子・松本 直祐樹	
10-002						修Ⅰ	西洋芸術音楽総合演習Ⅱ	西洋芸術音楽総合演習Ⅱ	修Ⅰ	西洋芸術音楽総合演習Ⅱ	後期	黒坂 俊昭・泉 貴子・松本 直祐樹	
10-003						修Ⅰ	現代音楽特論	現代音楽特論	修Ⅰ	現代音楽特論	前期	中村 滋延	
10-004						修Ⅰ	スコア・リーディング	スコア・リーディング	修Ⅰ	スコア・リーディング	集中	若林 千春	
10-005						修Ⅰ	楽書講読A	楽書講読A	修Ⅰ	楽書講読A	前期	大谷 紀美子	
10-006						修Ⅰ	楽書講読B	楽書講読B	修Ⅰ	楽書講読B	後期	大谷 紀美子	
10-007						修Ⅰ	音楽によるアウトリーチA	音楽によるアウトリーチA	修Ⅰ	音楽によるアウトリーチA	後期	前田 昌宏・松谷 葉子	
10-008						修Ⅱ	音楽によるアウトリーチB	音楽によるアウトリーチB			前期	前田 昌宏・松谷 葉子	
10-009						修Ⅰ	音楽療法特論A	音楽療法特論A	修Ⅰ	音楽療法特論A	前期	石村 真紀	



9. 専攻科目



9-001

ナンバリング	期間	通年
授業科目名	専攻実技 A (声楽)	
英訳科目名	Applied Music A	
担当教員名	声楽部門	
ディプロマ・ポリシー-1	◎	ディプロマ・ポリシー-2 ○
ディプロマ・ポリシー-3	◎	ディプロマ・ポリシー-4 ○
ディプロマ・ポリシー-5	◎	ディプロマ・ポリシー-6
授業概要・ポイント	声楽演奏技術のさらなる向上と幅広いレパートリーの習得。	
到達目標	演奏家に必要とされる高度なテクニックを取得し、豊かな表現力を養うことを目的とする。 そして専攻科修了演奏会のプログラムをレパートリーとして演奏できる能力を会得する。	
授業計画	<p>受講者の適性に応じ、歌曲・オペラ・オラトリオ等の専門領域の発掘を促す。 各担当者指導者の授業計画で行う。</p> <p>第1回 顔合わせ・オリエンテーション (各担当指導者と) 第2回 前期の専門領域の課題決め① 第3回 前期の専門領域の課題決め② 第3回 音楽稽古 第4回 音楽稽古 (ディクッション中心①) 第5回 音楽稽古 (ディクッション中心②) 第6回 音楽稽古 (表現中心) 第7回 音楽稽古 (まとめ) 第8回 作品解釈① 第9回 作品解釈② 第10回 演奏解釈① 第11回 演奏解釈② 第12回 作品分析① 第13回 作品分析② 第14回 まとめ① 第15回 まとめ② 第16回 試験曲目選曲 第17回 プログラミング① 第18回 プログラミング② 第19回 試験曲プログラム (歌唱中心レッスン) 第20回 試験曲プログラム (歌唱技術中心レッスン) 第21回 試験曲プログラム (ディクッション中心) 第22回 試験曲プログラム (ディクッション中心) 第23回 試験曲プログラム (楽曲分析) 第24回 試験曲プログラム (作品解釈) 第25回 試験曲プログラム (演奏解釈) 第26回 試験曲プログラム (伴奏つき) 第27回 試験曲プログラム (HP) 第28回 試験曲プログラム (まとめ) 第29回 試験曲プログラム (GP) 第30回 試験</p>	
評価方法 (合計100%)	100点法、試験は後期のみとし15～20分程度のレパートリーを提出させる。 専攻実技： 100%	
失格条件	出席日数が2/3に満たないもの、及び試験を受けなかったもの。	
予習・復讐の準備 学習などのアドバイス	学ぶ楽曲が多くなるので、訳詞を根気よく調べ、内容を深く理解することが大切。 (1週間にかける予習・復習の学修時間の目安 : 9時間 歌詞・作品の内容の理解、正しい発音、原語の朗読、 演奏解釈)	
課題へのフィード バック	毎時レッスンにおいて個々に必要とされる課題を提示し、次回以降のレッスンにおいてその課題についてクリア ーできたか、クリアーしていくためにどういった練習・勉強が必要なのかを行っていく。	
教科書	不使用	
著者名		
出版社		
参考書		
その他	試験の際、曲目の指定もしくはカットなどの処置をする場合がある。	
備考		
科目生への開講	なし	

9-002

ナンバリング	期間	通年
授業科目名	専攻実技 B (声楽)	
英訳科目名	Applied Music B	
担当教員名	声楽部門	
ディプロマ・ポリシー-1	◎	ディプロマ・ポリシー-2 ○
ディプロマ・ポリシー-3	◎	ディプロマ・ポリシー-4 ○
ディプロマ・ポリシー-5	◎	ディプロマ・ポリシー-6
授業概要・ポイント	声楽演奏技術のさらなる向上と幅広いレパートリーの習得。	
到達目標	演奏家に必要とされる高度なテクニックを取得し、豊かな表現力を養うことを目的とする。 そして専攻科修了演奏会のプログラムをレパートリーとして演奏できる能力を会得する。	
授業計画	<p>受講者の適性に応じ、歌曲・オペラ・オラトリオ等の専門領域の発掘を促す。 各担当者指導者の授業計画で行う。</p> <p>第1回 顔合わせ・オリエンテーション (各担当指導者と) 第2回 前期の専門領域の課題決め① 第3回 前期の専門領域の課題決め② 第3回 音楽稽古 第4回 音楽稽古 (ディクッション中心①) 第5回 音楽稽古 (ディクッション中心②) 第6回 音楽稽古 (表現中心) 第7回 音楽稽古 (まとめ) 第8回 作品解釈① 第9回 作品解釈② 第10回 演奏解釈① 第11回 演奏解釈② 第12回 作品分析① 第13回 作品分析② 第14回 まとめ① 第15回 まとめ② 第16回 試験曲目選曲 第17回 プログラミング① 第18回 プログラミング② 第19回 試験曲プログラム (歌唱中心レッスン) 第20回 試験曲プログラム (歌唱技術中心レッスン) 第21回 試験曲プログラム (ディクッション中心) 第22回 試験曲プログラム (ディクッション中心) 第23回 試験曲プログラム (楽曲分析) 第24回 試験曲プログラム (作品解釈) 第25回 試験曲プログラム (演奏解釈) 第26回 試験曲プログラム (伴奏つき) 第27回 試験曲プログラム (HP) 第28回 試験曲プログラム (まとめ) 第29回 試験曲プログラム (GP) 第30回 試験</p>	
評価方法 (合計100%)	100点法、試験は後期のみとし15～20分程度のレパートリーを提出させる。 専攻実技： 100%	
失格条件	出席日数が2/3に満たないもの、及び試験を受けなかったもの。	
予習・復讐の準備 学習などのアドバイス	学ぶ楽曲が多くなるので、訳詞を根気よく調べ、内容を深く理解できることが大切。 (1週間にかける予習・復習の学修時間の目安 : 9時間 歌詞・作品の内容の理解、正しい発音、原語の朗読、 演奏解釈)	
課題へのフィード バック	毎時レッスンにおいて個々に必要とされる課題を提示し、次回以降のレッスンにおいてその課題についてクリア ーできたか、クリアーしていくためにどういった練習・勉強が必要なのかを行っていく。	
教科書	不使用	
著者名		
出版社		
参考書		
その他	試験の際、曲目の指定もしくはカットなどの処置をする場合がある。	
備考		
科目生への開講	なし	

9-003

ナンバリング	期間	通年
授業科目名	専攻実技 A (管弦打楽器)	
英訳科目名	Applied Music A	
担当教員名	管弦打部門	
ディプロマ・ポリシー1	ディプロマ・ポリシー2	
ディプロマ・ポリシー3	ディプロマ・ポリシー4	
ディプロマ・ポリシー5	ディプロマ・ポリシー6	
授業概要・ポイント	古典より現代に至る幅広い楽曲の演奏能力を習得させることを目的とし、各人能力に応じた教材を与えて、確実な基礎技術を習得させ、より高度な技術と音楽性の向上に力を注ぐ。	
到達目標	①専攻科修了演奏会において演奏する。 ②自立できる演奏家になる。	
授業計画	専攻実技 I～IVに準ずる。	
評価方法 (合計100%)	試験の演奏を評価する。	
失格条件	出席日数が2/3に満たなかった者、及び試験を受けなかった者	
予習・復讐の準備 学習などのアドバイス	基礎練習を毎日の練習の初めに日課とする。 些細な問題点でも一つずつ解決する積み重ねの努力をする。 音楽だけではなく、音楽以外の芸術作品などを通して将来音楽の表現に結びつける要素を学ぶ。	
課題へのフィード バック	演奏会や試験を通してその都度評価と反省の議論を通し、より高度な演奏水準を目指す。	
教科書	不使用	
著者名		
出版社		
参考書		
その他		
備考		
科目生への開講	なし	

1

2

3

4

5

6

7

8

9

10

9-004

ナンバリング		期間	通年
授業科目名	専攻実技 B (管弦打楽器)		
英訳科目名	Applied Music B		
担当教員名	管弦打部門		
ディプロマ・ポリシー1		ディプロマ・ポリシー2	
ディプロマ・ポリシー3		ディプロマ・ポリシー4	
ディプロマ・ポリシー5		ディプロマ・ポリシー6	
授業概要・ポイント	古典より現代に至る幅広い楽曲の演奏能力を習得させることを目的とし、各人能力に応じた教材を与えて、確実な基礎技術を習得させ、より高度な技術と音楽性の向上に力を注ぐ。		
到達目標	①フェニックスホールで開催される専攻科修了演奏会において演奏する。 ②自立できる演奏家になる。		
授業計画	専攻実技 I～IVに準ずる。		
評価方法 (合計100%)	試験の演奏を評価する。		
失格条件	出席日数が2/3に満たなかった者、及び試験を受けなかった者		
予習・復讐の準備 学習などのアドバイス	基礎練習を毎日の練習の初めに日課とする。 些細な問題点でも一つずつ解決する積み重ねの努力をする。 音楽だけではなく、音楽以外の芸術作品などを通して将来音楽の表現に結びつける要素を学ぶ。		
課題へのフィード バック	演奏会や試験を通してその都度評価と反省の議論を通し、より高度な演奏水準を目指す。		
教科書	不使用		
著者名			
出版社			
参考書			
その他			
備考			
科目生への開講	なし		

9-005

ナンバリング	期間	集中
授業科目名	修了演奏	
英訳科目名	Postgraduate Recital	
担当教員名	松本 直祐樹、教務主任	
ディプロマ・ポリシー1	ディプロマ・ポリシー2	
ディプロマ・ポリシー3	ディプロマ・ポリシー4	
ディプロマ・ポリシー5	ディプロマ・ポリシー6	
授業概要・ポイント	これまでの学習成果を演奏会という形式で発表する。演奏会は公開で行われる。	
到達目標	音楽の専門の道を学んだ者としてふさわしいレベルの高い演奏をすること。	
授業計画	専攻実技A・Bにより修了演奏の楽曲について指導する。	
評価方法 (合計100%)	演奏実技100% 演奏会当日の本学教授陣の審査によって評価される。	
失格条件	修了演奏会に出席できなかった場合。	
予習・復讐の準備 学習などのアドバイス	日々の鍛錬を惜しまないこと。	
課題へのフィード バック	演奏会終了後、個別にコメントします。	
教科書	不使用	
著者名		
出版社		
参考書		
その他		
備考		
科目生への開講	なし	

1

2

3

4

5

6

7

8

9

10

ナンバリング		期間	通年
授業科目名	特殊研究Ⅲ		
英訳科目名	Specialized Studies Ⅲ		
担当教員名	黒坂 俊昭		
ディプロマ・ポリシー1		ディプロマ・ポリシー2	
ディプロマ・ポリシー3		ディプロマ・ポリシー4	
ディプロマ・ポリシー5		ディプロマ・ポリシー6	
授業概要・ポイント	<p>「演奏」するという営みは、個性の表現であると言われることも多いが、その主観的表現には必ず理性的な制御が伴っているのは言うまでもない。また楽曲の解釈にあたっては、それは決してひたすら感性で行なわれるものではなく、客観的な判断にも依拠している。本講は、この「演奏」を専門とする受講生が、そういった客観的な判断力を育成することを目的としている。具体的には、受講生が1年をかけて一つのテーマに取り組み、その事項について深く考察するとともに、文章でもってその成果をまとめあげることが求められる。</p>		
到達目標	<ul style="list-style-type: none"> ・ 音楽を客観的に解釈することができるようになる。 ・ 自らおよび自らの「演奏」を客観的に捉えることができるようになる。 ・ 楽曲や演奏を客観的な文章で紹介することができるようになる。 		
授業計画	<p>第1回 本演習の内容と意義の紹介 第2～3回 テーマの設定 第4～8回 第1回発表（1人30分） 第9～14回 第2回発表（1人30分） 第15回 前期のまとめと夏期休暇中の課題提示 第16～18回 夏期休暇中の研究成果報告（1人15分） 第19～25回 第3回発表（1人45分） 第26回 後期の研究成果報告（1人15分） 第27～29回 個人研究のレポート作成 第30回 1年間のまとめ</p>		
評価方法 (合計100%)	<ul style="list-style-type: none"> ・ 授業への参加態度： 20% ・ 前期レポート： 30% ・ 最終レポート： 50% ・ 授業を欠席すれば、1回あたり4%を減ずる。 		
失格条件	なし		
予習・復讐の準備 学習などのアドバイス	<ul style="list-style-type: none"> ・ 適宜、授業内で指示する。 ・ 授業に臨むにあたって、レポート等の発表に向け、毎週準備に努めること（予習時間： 3時間） ・ 発表の際に指摘された事柄について検討すること（復習時間： 1時間） 		
課題へのフィード バック	専攻科修了演奏会における演奏曲目の解説をプログラムに公表する。		
教科書	不使用		
著者名			
出版社			
参考書			
その他	・ 教材は、必要に応じて、レジュメ・コピーを配布する。		
備考			
科目生への開講	なし		

9-007

ナンバリング		期間	通年
授業科目名	作品研究		
英訳科目名	Studies in Composition Pieces		
担当教員名	三鬼 尚味		
ディプロマ・ポリシー1		ディプロマ・ポリシー2	
ディプロマ・ポリシー3		ディプロマ・ポリシー4	
ディプロマ・ポリシー5		ディプロマ・ポリシー6	
授業概要・ポイント	<p>本講は、受講者の希望する楽曲を分析します。</p> <p>作品に秘められた作者の想いを紐解くべく、分析するための必要な知識を習得し、理論的に譜面を読み解く力を養います。</p> <p>また、分析した作品を、各人の専門(演奏・作曲)につなげていく多面的な分析も試みます。</p>		
到達目標	確実に作品分析（構造分析）が出来る。		
授業計画	<p>第1回 本講の具体的な説明と理解。研究する作品の検証(授業では受講者の希望作品を取り上げる)。</p> <p>第2回 作品分析の手順と方法。</p> <p>第3～14回 分析に必要な基本的知識の習得。各々の作品研究と分析。</p> <p>第15回 研究作品のレポート提出。</p> <p>第16～29回 分析に必要な基本的知識の習得。各々の作品研究と分析。</p> <p>第30回 研究作品のレポート提出または発表（演奏などを含めても良い）。</p>		
評価方法 (合計100%)	<p>①授業への参加態度 50%</p> <p>②1回目の研究作品のレポート提出による評価 20%</p> <p>③2回目の研究作品のレポート提出。または、発表・演奏による評価。どちらかを選択することが出来る。30%以上の評価を総合的に判断する。</p>		
失格条件	<p>①授業への不参加</p> <p>②研究作品のレポート未提出</p> <p>③研究作品の未発表、またはレポート未提出</p>		
予習・復讐の準備 学習などのアドバイス	<p>分析する楽曲についての様々な背景を調べておく。</p> <p>講義で勉強した内容を確認しておく。</p>		
課題へのフィード バック	<p>講義内容・課題について、理解出来るまで指導します。</p> <p>課題提出後、分かり易く丁寧にコメントを付けて個別に返却します。</p>		
教科書	授業内で随時プリント配布		
著者名			
出版社			
参考書			
その他			
備考			
科目生への開講	なし		

1

2

3

4

5

6

7

8

9

10

ナンバリング		期間	通年
授業科目名	演奏解釈		
英訳科目名	Studies of Interpretation of Musical Performance		
担当教員名	松本 直祐樹、稲垣 聡、中谷 満、泉 貴子		
ディプロマ・ポリシー-1		ディプロマ・ポリシー-2	
ディプロマ・ポリシー-3		ディプロマ・ポリシー-4	
ディプロマ・ポリシー-5		ディプロマ・ポリシー-6	
授業概要・ポイント	バロック音楽から20世紀音楽までの具体的な作品を取り上げ、作曲理論的な分析による楽曲構造の解明や、作品の楽曲解釈を行う。また、さまざまな演奏家の録音や映像、担当教員の実際の演奏や経験を通して各人の専門分野を活かしながら、より多面的な分析と考察を試みることによって、多様な演奏解釈と音楽芸術について研究していくことを目的とする。		
到達目標	多様な演奏解釈と、音楽芸術の研究力を身につける。		
授業計画	<p>4人の担当教員がそれぞれの担当時間内で、以下の講義を行なう。</p> <p>第1回 年間の授業計画・内容について説明する。</p> <p>第2～8回 担当：松本直祐樹 近代から現代の音楽をテーマとして、楽曲の構造、解釈の方向性を考察する。そして現代の音楽がどのように創造されるかを知ることを目的とする。 予定している講義は以下の通りである。 2. フランス音楽の潮流（旋法と倍音による作曲） 3. 新ウィーン楽派の音楽（十二音技法概説） 4. ハンガリーの音楽（G.Ligetiの音楽を中心に） 5. アメリカ実験音楽（J.Cage, M.Feleman,他） 6. ミニマル・ミュージック（S.Reichの音楽を中心に） 7. 邦人作曲家（実験工房の音楽） 8. 創作することの意味</p> <p>第9～15回 担当：泉 貴子 作品解釈の考察を深め、そして様々な演奏家による解釈を理解することによって、あらゆる視点から作品と向き合い、演奏面において表現力を豊かにしていくことを目指す。 初回の講義ではオペラ作品等の声楽作品を取り上げ、数人の異なった歌手による演奏の録音を聴き比べ鑑賞することによって、各々の歌手の作品の解釈や観点の違いを探り、どのような表現につながっているかを考察する。また同じ時に複数の作曲家が作曲した例などを挙げ、作風・作曲技巧の違い、インスピレーションの受け方についてディスカッションを交えてお互いの意見を交換していく。また作品をあらゆる視点から考察し、解釈を進めることによって演奏時における表現の指標となることを理解する。 第2回目からの講義では学生が1～2つの作品を選び、作品解釈し、複数の演奏家による演奏を聴き比べ演奏解釈の考察を深める。そしてそれを演習形式で発表していく。また他専攻との交流が深められるこの講義によって、自分の専攻と他専攻との関わり、様々な作品に多く触れる機会をもつことから感性を磨き、高めることもねらいである。 6. 作品解釈する上での様々な観点の見つけ方、数人の演奏家の演奏を聴き比べることによる演奏解釈～C.D.シュバルト『調の性格』等を例に挙げながら～ 7. 学生による研究発表①：作品の選択（古典派時代以前～古典派）、作品分析・解釈、演奏解釈したものをプレゼンテーション・ディスカッション・プログラムノートの作成 8. 学生による研究発表②：作品の選択（古典派）、作品分析・解釈、演奏解釈したものをプレゼンテーション・ディスカッション・プログラムノートの作成 9. 学生による研究発表③：作品の選択（ロマン派）、作品分析・解釈、演奏解釈したものをプレゼンテーション・ディスカッション、考察のまとめ方 10. 学生による研究発表④：作品の選択（ロマン派～現代）、作品分析・解釈、演奏解釈したものをプレゼンテーション・ディスカッション、考察のまとめ方 11. 学生による研究発表⑤：作品の選択（現代）、作品分析・解釈、演奏解釈したものをプレゼンテーション・ディスカッション、論点の見つけ方 12. 学生による研究発表：1～2作品を選び、作品分析・解釈、演奏解釈したものをプレゼンテーション・ディスカッション、論点の見つけ方 毎回講義ではディスカッションの時間をとる。作品、演奏に対しての自分の感想や感じ方等積極的に発言することが望まれる。</p> <p>第16～22回 担当：中谷 満 35年のオーケストラ在籍中に古典や近現代のオーケストラ作品、また室内アンサンブル等での現代音楽などの演奏を通じ、多くの楽曲に触れた中から音楽の三要素の一つ、リズムの構造を研究・分析・演習を行いながら、演奏解釈の基礎を共に学びましょう。 16.リズムの構造と演習1（二拍子、四拍子、三拍子、六拍子等のリズム構造と連符の分析） 17.リズムの構造と演習2（アクセントの移動と、リズムの拍移動） 18.変拍子のリズム構造と演習（ストラヴィンスキー「春の祭典」の分析） 19.ミニマルミュージックの鑑賞と演習（スティーブ・ライヒ「ドラミング」「木片の音楽」の分析） 20.図形楽譜の読み方と演習（クセナキス、シュトックハウゼン、武満徹の図形楽譜の分析） 21.ポディーパークッションの演習 22.指揮者とオーケストラの関係（打楽器奏者から見た、ベルリン留学時代のカラヤンと大阪フィル時代の朝比奈隆の思い出話）</p> <p>第23～29回 担当：稲垣 聡 近代から20世紀音楽の作曲家と作品を取り上げ、音楽様式・語法などを考察する。 23. 後期ロマン派の終焉 24. C. Debussy 25. 新ウィーン楽派(A.Schoenberg, A.Berg, A.Webern) 26. O. Messiaen 27. J.Cage 28. 日本の作曲家「武満徹」 29. 学生による発表(各自一人の作曲家に着目し、その作曲家の音楽観・音楽語法について自身の考えを述べること)</p> <p>第30回 学生による、演奏会形式での発表</p>		
評価方法 (合計100%)	授業への参加態度 100%		
失格条件	以下の項目のいずれかに該当する者 ・ 指定の課題を提出しなかった者 ・ 出席が2/3に満たない者は失格となる		
予習・復讐の準備 学習などのアドバイス	毎回の講義内容を理解し、各自の練習・研究に生かす様に。		
課題へのフィード バック	授業内の演奏、発言等について、授業内でコメントおよび評価をする。		
教科書	不使用		
著者名			
出版社			
参考書			
その他	教科書など必要な場合は、授業内で各担当教員から説明する。		
備考			
科目生への開講	なし		

ナンバリング	期間	前期
授業科目名	西洋音楽史特殊講義 A	
英訳科目名	Special Seminar in Western music History A	
担当教員名	村井 晶子	
ディプロマ・ポリシー1	ディプロマ・ポリシー2	
ディプロマ・ポリシー3	ディプロマ・ポリシー4	
ディプロマ・ポリシー5	ディプロマ・ポリシー6	
授業概要・ポイント	音楽作品の基本構造である対位法と和声法の誕生からの変遷の過程をたどり、その観点から音楽史の流れを概観する。この講義を通じて、いつの時代でも和声法のみならず、対位法を意識して作品が構築されていることを理解する。	
到達目標	西洋の芸術音楽の演奏実践に際して、対位法などのスタイルや演奏法、演奏環境の変遷を理解した上での作品分析、解釈ができるようになることを目標とする。	
授業計画	第1回 はじめに：現代まで通じる音楽の始まり～モノフォニー 第2回 ポリフォニーの成立と発展 第3回 新しい音楽：オペラ モンテヴェルディ 第4回 機能と和声の成立 ラモー 第5回 トピック：ダンス音楽 バロックダンス 第6回 明快な音世界の構築 ヘンデル 第7回 円環の宇宙を語る J. S. バッハ (器楽曲) 第8回 円環の宇宙を語る J. S. バッハ (受難曲) 第9回 音楽の矢 モーツァルト (器楽曲) 第10回 音楽の矢 モーツァルト (オペラ) 第11回 個の表現 ショパン 第12回 伝統と革新の新たな融合 1 ブラームス (交響曲第1番) 第13回 伝統と革新の新たな融合 2 ブラームス (交響曲第4番) 第14回 究極の機能と和声/ライトモチーフ ワグナー (レポート提出) 第15回 脱・機能と和声 ドビュッシー、シェーンベルク；まとめ (レポートへのフィードバックを含む)	
評価方法 (合計100%)	前期末のレポート 70% 授業への参加態 30%	
失格条件	下記の条件のいずれか一方 (あるいは両方) に該当する場合： 1. 出席回数が3分の2に達しなかった 2. 前期末にレポートを提出しなかった	
予習・復讐の準備 学習などのアドバイス	授業では、新たな視点から音楽作品を分析し、演奏実践への応用を視野に入れた論を受講者と共に展開する。従って、受講者は、それぞれ自らの音楽実践にどう活かすかという視点で授業に臨み、また実践につなげる姿勢を持つことが重要である。 毎週、講義終了後、2時間程度の配布資料の復習と、2時間程度の、紹介した音楽の視聴 (楽譜の検討も合わせて)、もしくは自身の専攻実技への反映の検討を行う。	
課題へのフィードバック	講義した内容を理解することと、同じ程度に、先行実技での音楽の解釈、表現に、講義した内容がどのような意味を持つか検討することが極めて重要である。 14回目の授業の際にレポートを提出し、15回目の講義でフィードバックするが、レポートの評価にあたっては、専攻生自身の先行する音楽領域に、講義の内容を反映させて検討を加えてあるかを重視する。	
教科書	特に指定しない。必要に応じて資料を配布する。	
著者名		
出版社		
参考書	講義中に適宜紹介する。	
その他		
備考		
科目生への開講	なし	

ナンバリング	期間	後期
授業科目名	西洋音楽史特殊講義 B	
英訳科目名	Special Seminar in Western music History B	
担当教員名	村井 晶子	
ディプロマ・ポリシー1	ディプロマ・ポリシー2	
ディプロマ・ポリシー3	ディプロマ・ポリシー4	
ディプロマ・ポリシー5	ディプロマ・ポリシー6	
授業概要・ポイント	<p>器楽がバロック時代に大きく発展して以来、古典派から後期ロマン派に至って室内楽曲が精緻になり、一方では、交響曲が大規模化していく過程を紹介する。特に、後の作曲家が前の作曲家の作品をどのように研究し、自らの作曲技法として取り込んでいったかについて検討したい。</p> <p>また、演奏環境としてのホールや指揮者の視点からの音楽事情についても探る。</p>	
到達目標	西洋の芸術音楽の演奏実践に際して、音楽史の流れを意識した作品分析、解釈ができるようになることを目標とする。	
授業計画	<p>第1回 交響曲の誕生</p> <p>第2回 J.S. バッハの息子たち</p> <p>第3回 三人目のスカルラッティ (バロックオペラ)</p> <p>第4回 バロック音楽からウィーン古典派への流れ</p> <p>第5回 ウィーン古典派音楽の音楽語法</p> <p>第6回 弦楽四重奏曲、五重奏曲 (ハイドン、モーツァルト、ボッケリーニ)</p> <p>第7回 W.A. モーツァルト (初期のピアノ協奏曲)</p> <p>第8回 W.A. モーツァルト フィガロの結婚</p> <p>第9回 W.A. モーツァルト コジ・ファン・トゥッテ</p> <p>第10回 W.A. モーツァルト (交響曲第36番)</p> <p>第11回 L.v. ベートーヴェン (交響曲第3番)</p> <p>第12回 ブラームス (2つの2番)</p> <p>第13回 音楽は遺伝する? 個人様式と時代様式</p> <p>第14回 ロマン派〜ドビュッシーのピアノ曲 (レポート提出)</p> <p>第15回 ハンス・フォン・ビューロー 指揮者から見たロマン派音楽 (レポートへのフィードバックを含む)</p>	
評価方法 (合計100%)	<p>後期末のレポート 70%</p> <p>授業への参加態度 30%</p>	
失格条件	<p>下記の条件のいずれか一方 (あるいは両方) に該当する場合:</p> <p>1. 出席回数が3分の2に達しなかった</p> <p>2. 後期末にレポートを提出しなかった</p>	
予習・復讐の準備 学習などのアドバイス	<p>授業では、新たな視点から音楽作品を分析し、演奏実践への応用を視野に入れた論を受講者と共に展開する。従って、受講者は、それぞれ自らの音楽実践にどう活かすかという視点で授業に臨み、また実践につなげる姿勢を持つことが重要である。</p> <p>毎週、講義終了後、2時間程度の配布資料の復習と、2時間程度の、紹介した音楽の視聴 (楽譜の検討も合わせ)、もしくは自身の専攻実技への反映の検討を行う。</p>	
課題へのフィードバック	<p>講義した内容を理解することと、同じ程度に、先行実技での音楽の解釈、表現に、講義した内容がどのような意味を持つか検討することが極めて重要である。</p> <p>14回目の授業の際にレポートを提出し、15回目の講義でフィードバックするが、レポートの評価にあたっては、専攻生自身の先行する音楽領域に、講義の内容を反映させて検討を加えてあるかを重視する。</p>	
教科書	特に指定しない。必要に応じて資料を配布する。	
著者名		
出版社		
参考書	講義中に適宜紹介する。	
その他		
備考		
科目生への開講	なし	

ナンバリング		期間	通年
授業科目名	合奏		
英訳科目名	Instrumental Ensemble		
担当教員名	管弦打部門		
ディプロマ・ポリシー1		ディプロマ・ポリシー2	
ディプロマ・ポリシー3		ディプロマ・ポリシー4	
ディプロマ・ポリシー5		ディプロマ・ポリシー6	
授業概要・ポイント	合奏は管弦楽のオーケストラをはじめ、弦楽オーケストラ、ウインド・オーケストラ、及びその他の小編成のアンサンブルの合奏体を有し、学生はいずれかのグループに配属され、指揮の見方や多人数の中での音の響かせ方、ハーモニーの作り方を体得するという基本的な事柄をはじめ、スコアを通しての音楽像全体の把握、指揮者の音楽的要求の理解、全体の調和にいたるまでの合奏に必要な技術を体得する。		
到達目標	オーケストラ授業での分奏、合奏を通じ得たアンサンブル力を、演奏会で発揮出来る事を目指す。		
授業計画	<p>第1回 オリエンテーション</p> <p>第2～3回 合奏 指揮者の音楽を感じ取る</p> <p>第4～5回 細分奏 音程、ハーモニーの調和</p> <p>第6～7回 分奏 各楽器間のアンサンブル</p> <p>第8～10回 合奏 各楽器間のアンサンブル</p> <p>第11回 自主分奏 各自の演奏技能の向上</p> <p>第12回 鑑賞 CD, DVD等で研究</p> <p>第13～14回 分奏 アーティキレーションの確認</p> <p>第15回 合奏 音量、音程、ハーモニー、リズムの調和</p> <p>第16～17回 合奏 表現力の向上</p> <p>第18回 演奏会 本番での対応力</p> <p>第19回 反省会 後期オリエンテーション</p> <p>第20回 合奏 指揮者、コンサートマスターとの、連携</p> <p>第21～22回 分奏 各楽器間のアンサンブル</p> <p>第23～24回 細分奏 音程、ハーモニーの調和</p> <p>第25回 自主分奏 各自の演奏力の向上</p> <p>第26回 鑑賞 CD, DVD等で研究</p> <p>第27～29回 合奏 オペラソリストとの合わせ</p> <p>第30回 演奏会 本番での対応力</p>		
評価方法 (合計100%)	授業への参加態度、表現力、アンサンブル力等を考慮の上、評価する。		
失格条件	なし		
予習・復讐の準備 学習などのアドバイス	課題について事前に準備、練習し授業にのぞむ事		
課題へのフィード バック	定期演奏会等の本番終了後の授業で、全体に向けてコメントします。		
教科書	不使用		
著者名			
出版社			
参考書			
その他			
備考			
科目生への開講	なし		

9-012

ナンバリング		期間	通年
授業科目名	室内楽		
英訳科目名	Chamber music		
担当教員名	ピアノ・管弦打部門		
ディプロマ・ポリシー1		ディプロマ・ポリシー2	
ディプロマ・ポリシー3		ディプロマ・ポリシー4	
ディプロマ・ポリシー5		ディプロマ・ポリシー6	
授業概要・ポイント	<p>学内において、また将来社会人となって演奏の場を得る場合、他の演奏者（複数）と音楽を共有する機会が多々あると思われる。室内楽はそうした環境に円滑に対応すべく、室内楽に必要な技術、すなわち正しいタイミングによる合わせ方、楽器間のバランスの取り方、ハーモニーの調和能力などを学び、習得し、演奏者にとって必要とされる“耳の良さ”を培っていく。さらに、演奏者同士が気持ちをひとつにして相互に信頼関係を築き、より高い次元の音楽性を目指していく意識を育てていくことを目標とする。</p>		
到達目標	コンサートで演奏する。		
授業計画	<p>第1回 グループ編成と登録 第2回 学習する楽曲の設定および年間の学習計画 第3回 各人のパート練習とグループでの合わせ（練習） 第4回 レッスン受講（室内楽演奏に必要なとされる技術を習得）</p>		
評価方法 (合計100%)	学年末の試験を受け、その演奏を評価する。(100%)		
失格条件	受講時間数が、試験前の決められた期日までに12時間(45分×12)に満たなかった者、及び試験を受けなかった者		
予習・復習の準備 学習などのアドバイス	各グループで計画的な練習スケジュールを立て、和音感、和声進行、パート間の連携などを楽譜（スコア）から読み取り、効果的なりハーサルを重ねていく。予習・復習については、1回のレッスンのために180分（4時間）以上を必要とする。		
課題へのフィードバック	試験後に採点を行なった教員が、受験した室内楽グループ個別に講評をする。		
教科書	各グループが選んだ曲目のスコア、パート譜については、それぞれが手配する。		
著者名	(各グループにより異なる)		
出版社	(各グループにより異なる)		
参考書			
その他	授業のすすめ方については、グループ登録時に詳細を記した「室内楽実施要領」を配布する。また同時に内容を掲示する。		
備考			
科目生への開講	なし		

ナンバリング	期間	通年
授業科目名	オペラ演習	
英訳科目名	Opera Production	
担当教員名	泉 貴子	
ディプロマ・ポリシー1	◎	ディプロマ・ポリシー2 ○
ディプロマ・ポリシー3	◎	ディプロマ・ポリシー4 ○
ディプロマ・ポリシー5	◎	ディプロマ・ポリシー6
授業概要・ポイント	オペラの基礎的演唱を学び更に発展させ、舞台演唱を深めていく。まとめとして舞台装置や衣装を用い、原語上演の試演会で発表する。	
到達目標	この授業単位を取得することにより、共同でオペラ制作にかかわる大切さ・責任感・技術的向上が出来るようになること。	
授業計画	<p>年ごとに学内オペラ公演の演目を決め、その公演に出演できるように目標をたて、作品を仕上げていく。その作品全体の分析・解釈、及び各自役柄への探求を行う。</p> <p>第1回 ディクシオン稽古① 第2回 ディクシオン稽古② 第3回 音楽稽古① 第4回 音楽稽古② 第5回 音楽稽古③ 第6回 音楽稽古④ 第7回 音楽稽古⑤ 台詞稽古① 第8回 音楽稽古⑥ 台詞稽古② 第9回 音楽稽古⑦ 台詞稽古③ 第10回 音楽稽古⑧ 台詞稽古④ 第11回 ディクシオンまとめ 音楽稽古⑨ 第12回 ディクシオンまとめ 音楽稽古⑩ 第13～15回 指揮者による音楽稽古 第16回 ディクシオン稽古 立ち稽古 第17回 ディクシオン稽古 立ち稽古 第18回 音楽稽古 立ち稽古 第19回 音楽稽古 立ち稽古 第20回 音楽稽古 立ち稽古 第21回 立ち稽古 第22回 立ち稽古 台詞稽古 第23回 立ち稽古 台詞稽古 第24回 立ち稽古 台詞稽古 第25回 音楽稽古 立ち稽古 第26回 総稽古 第27回 HP 第28回 オケ合わせ 第29回 GP 第30回 本番</p>	
評価方法 (合計100%)	授業への参加態度 60% 試演会の演唱 40%	
失格条件	出席が2/3に満たない者。	
予習・復讐の準備 学習などのアドバイス	履修者には試演会の曲を発表する段階で、役柄・勉強の方法を掲示するのでそれにそって準備すること。 又、その都度演習で与えられた課題を次回まで繰り返し練習すること。 (1週間にかかる予習・復習の学修時間の目安 : 6時間 譜読み、正しい発音による朗読、歌詞・作品の内容理解等)	
課題へのフィードバック	毎時、次回授業までの課題をあたえ、その次の授業にて個別、または全体を通して解説していきます。	
教科書	指定された楽譜購入	
著者名		
出版社		
参考書		
その他		
備考		
科目生への開講	なし	

ナンバリング		期間	通年
授業科目名	通奏低音		
英訳科目名	Continuo		
担当教員名	青木 好美		
ディプロマ・ポリシー1		ディプロマ・ポリシー2	
ディプロマ・ポリシー3		ディプロマ・ポリシー4	
ディプロマ・ポリシー5		ディプロマ・ポリシー6	
授業概要・ポイント	基本的には、チェンバロを使って個人レッスンの形態で行う。17, 18世紀頃、ヨーロッパで実践された伴奏技法で、through bass(英)、basso continuo(伊)、Generalbass(独)等、表される。授業では通奏低音の数字付きのものから学ぶ。数字の意味を一通り理解し練習課題を実習した後、解り易いバロック時代の作品を実際にリアリゼーションしたり、演習をする。楽曲は、適宜クラスで選択する。尚、鍵盤楽器専攻外の履修希望者があれば、相談の上、履修の可能性あり。		
到達目標	チェンバロ専攻生、その他の専攻生共に、後期試験が到達目標となるが、チェンバロ専攻生は、コンサートにおいて、他の楽器や歌などと、アンサンブルの形で発表できる。		
授業計画	<p>《前期》</p> <p>第1～4回 通奏低音の説明と和声の基本形を理解し実習。</p> <p>第5～10回 第1、第2転回形とカデンツ及び練習課題の実習。</p> <p>第11～15回 7の和音とその転回形、及び繋留を含む実習。単純な和声から成るバロック期作品のリアリゼーションにも取り組む。(進度による)</p> <p>《後期》</p> <p>第1～5回 繋留、先取り、経過などを含む復習課題と新課題。</p> <p>第6～10回 更に充実した和声から成るバロック期作品(通奏低音付きソロ曲やトリオソナタ、クアルテット等)のリアリゼーションと即興演奏。</p> <p>第11～15回 総復習と試験形態に則した課題実習と初見実習。更に意欲のある学生は、バロック時代のマドリガルや小編成オーケストラのスコアを読むチャンスへと広げて勉強することもできる。(進度による)</p>		
評価方法 (合計100%)	授業への参加態度	40%	
	後期試験	50%	
	課題実習提出	10%	
失格条件	試験を受けなかった場合。		
予習・復讐の準備 学習などのアドバイス	宿題が出された場合は、仕上げてくること。解らないことは、遠慮せず質問し、復習をする事が必要です。その為にも、一週当たり270分以上の学修時間が望ましい。		
	授業以外でもバロック期作品のアンサンブルに取組み、実際に演奏する事から学び、楽しんで欲しい。課外の実習に関する質問についても、適宜対応します。		
課題へのフィードバック	実技、実習の取り組みに対して個別にコメントします。		
教科書	特になし。クラスによる。		
著者名			
出版社			
参考書	特になし。クラスによる。		
その他			
備考			
科目生への開講	なし		

9-015

ナンバリング		期間	通年
授業科目名	室内楽演習		
英訳科目名			
担当教員名	柏木 玲子		
ディプロマ・ポリシー1		ディプロマ・ポリシー2	
ディプロマ・ポリシー3		ディプロマ・ポリシー4	
ディプロマ・ポリシー5		ディプロマ・ポリシー6	
授業概要・ポイント	<p>電子オルガンコース ピアノコース共通 創作演奏という新しい分野、ジャンルにこだわらず自分の目指す音楽をより詳しく追及する。 その目指す音楽を演奏技術だけではなく作曲、編曲それぞれの分野で発揮できるよう研究を重ねる。</p> <p>電子オルガンコース、ピアノコース共に スコアリーディングでアナリゼを重ねて多くの作曲家の作品を研究し、自分の音楽を構築する。</p> <p>卒業後の進路を考え、それに合った内容を一人一人決めて、お互いに演奏を聞きながらアンサンブルする喜びに触れる。 自ら作品を書いて演奏するというこの専攻で必須な即興演奏についても追及して、極めて行きたい。 電子オルガン、ピアノでのアンサンブルや、既成の観念にとられない音楽にも挑戦していきたい。</p>		
到達目標	<p>多くの作品を知る機会にし、協調性を高めることにも重きを置きたい。 将来の活動に応じた研究をする。</p>		
授業計画	<p>電子オルガン、ピアノコース共通</p> <p>第1回 作品について 第2回 作品についてのまとめ 第3回 アンサンブルを楽しむ時の各楽器について学ぶ 第4回 自作曲のアレンジ① 第5回 自作曲のアレンジ② 第6回 自作曲のアレンジ③ 第7回 作品の仕上げ① 第8回 作品の仕上げ② 第9回 作品の仕上げ③ 第10回 選択した楽器とのバランスについて研究する① 第11回 選択した楽器とのバランスについて研究する② 第12回 作品の最終仕上げ 第13回 音色、バランスの仕上げ 第14回 演奏合わせの研究 第15回 演奏の完成</p>		
評価方法 (合計100%)	授業への参加態度、提出作品50%、 試験50%		
失格条件	出席日数が2/3に満たない者 譜面、レポート等の不提出。試験に出席、協力しない。 特別な事由があるときは申し出ること。		
予習・復讐の準備 学習などのアドバイス	将来の活動に応じた研究目標を作る。 レッスンごとに毎回2時間以上の予習復習をすること。		
課題へのフィード バック	毎回授業内でコメントします。		
教科書	授業内で指示する		
著者名			
出版社			
参考書	必要に応じ、その都度指示する。		
その他	提出課題は所定の期日の提出すること。		
備考			
科目生への開講	なし		

9-016

ナンバリング		期間	通年集中
授業科目名	オーケストラ特別研究 A		
英訳科目名	Orchestra Studies A		
担当教員名	管弦打部門		
ディプロマ・ポリシー1		ディプロマ・ポリシー2	
ディプロマ・ポリシー3		ディプロマ・ポリシー4	
ディプロマ・ポリシー5		ディプロマ・ポリシー6	
授業概要・ポイント	履修者はオーディションにて選考される。 プロとして活躍する、オーケストラ奏者、アンサンブル奏者としての実践能力を身につけるために、国内外で活躍する、指揮者、演奏家の個人レッスン、や合奏指導のもと、実践力の充実を目指す。		
到達目標	履修者はオーディションにて選考される。 プロとして活躍する、オーケストラ奏者、アンサンブル奏者としての実践能力を身につけるために、国内外で活躍する、指揮者、演奏家の個人レッスン、や合奏指導のもと、実践力の充実を目指す。		
授業計画	第1回 スコアリーディング 古典から現代までの作品 第2回 オーケストラスタディ 古典から現代までの作品 第3回 映像や音源をもとに、作品の研究 第4回 オーケストラ研修、実習 第5回 オーケストラ鑑賞		
評価方法 (合計100%)	授業への参加態度、アンサンブル力、協調性などを考慮し、評価する。		
失格条件	なし		
予習・復讐の準備 学習などのアドバイス	オーケストラスタディ、スコアリーディング等を事前の準備を充分に行っておく。		
課題へのフィード バック	実技、実習の取り組みに対して個別にコメントします。		
教科書	不使用		
著者名			
出版社			
参考書			
その他			
備考			
科目生への開講	なし		

9-017

ナンバリング	期間	通年集中
授業科目名	オーケストラ特別研究 B	
英訳科目名	Orchestra Studies B	
担当教員名	管弦打部門	
ディプロマ・ポリシー1	ディプロマ・ポリシー2	
ディプロマ・ポリシー3	ディプロマ・ポリシー4	
ディプロマ・ポリシー5	ディプロマ・ポリシー6	
授業概要・ポイント	履修者はオーディションにて選考される。 プロとして活躍する、オーケストラ奏者、アンサンブル奏者としての実践能力を身につけるために、国内外で活躍する、指揮者、演奏家の個人レッスン、や合奏指導のもと、実践力の充実を目指す。	
到達目標	プロの演奏家として将来必要となるテクニック、スコアリーディング等を研究し、実践を踏まえアンサンブルや協調性を養う。	
授業計画	第1回 スコアリーディング 古典から現代までの作品 第2回 オーケストラスタディ 古典から現代までの作品 第3回 映像や音源をもとに、作品の研究 第4回 オーケストラ研修、実習 第5回 オーケストラ鑑賞	
評価方法 (合計100%)	授業への参加態度、アンサンブル力、協調性などを考慮し、評価する。	
失格条件	なし	
予習・復讐の準備 学習などのアドバイス	オーケストラスタディ、スコアリーディング等を事前の準備を充分に行っておく。	
課題へのフィード バック	実技、実習の取り組みに対して個別にコメントします。	
教科書	不使用	
著者名		
出版社		
参考書		
その他		
備考		
科目生への開講	なし	

1

2

3

4

5

6

7

8

9

10

9-018

ナンバリング		期間	通年集中
授業科目名	オーケストラ特別実習 A		
英訳科目名	Orchestra Workshop A		
担当教員名	管弦打部門		
ディプロマ・ポリシー1		ディプロマ・ポリシー2	
ディプロマ・ポリシー3		ディプロマ・ポリシー4	
ディプロマ・ポリシー5		ディプロマ・ポリシー6	
授業概要・ポイント	履修者はオーディションにて選考される。 プロとして活躍する、オーケストラ奏者、アンサンブル奏者としての実践能力を身につけるために、国内外で活躍する、指揮者、演奏家の個人レッスン、や合奏指導のもと、実践力の充実を目指す。		
到達目標	プロの演奏家として将来必要となるテクニック、スコアリーディング等を研究し、実践を踏まえアンサンブルや協調性を養う。		
授業計画	第1回 スコアリーディング 古典から現代までの作品 第2回 オーケストラスタディ 古典から現代までの作品 第3回 映像や音源をもとに、作品の研究 第4回 オーケストラ研修、実習 第5回 オーケストラ鑑賞		
評価方法 (合計100%)	授業への参加態度、アンサンブル力、協調性などを考慮し、評価する。		
失格条件	なし		
予習・復讐の準備 学習などのアドバイス	オーケストラスタディ、スコアリーディング等を事前の準備を充分に行っておく。		
課題へのフィード バック	実技、実習の取り組みに対して個別にコメントします。		
教科書	不使用		
著者名			
出版社			
参考書			
その他			
備考			
科目生への開講	なし		

9-019

ナンバリング		期間	通年集中
授業科目名	オーケストラ特別実習B		
英訳科目名	Orchestra Workshop B		
担当教員名	管弦打部門		
ディプロマ・ポリシー1		ディプロマ・ポリシー2	
ディプロマ・ポリシー3		ディプロマ・ポリシー4	
ディプロマ・ポリシー5		ディプロマ・ポリシー6	
授業概要・ポイント	履修者はオーディションにて選考される。 プロとして活躍する、オーケストラ奏者、アンサンブル奏者としての実践能力を身につけるために、国内外で活躍する、指揮者、演奏家の個人レッスン、や合奏指導のもと、実践力の充実を目指す。		
到達目標	プロの演奏家として将来必要となるテクニック、スコアリーディング等を研究し、実践を踏まえアンサンブルや協調性を養う。		
授業計画	第1回 スコアリーディング 古典から現代までの作品 第2回 オーケストラスタディ 古典から現代までの作品 第3回 映像や音源をもとに、作品の研究 第4回 オーケストラ研修、実習 第5回 オーケストラ鑑賞		
評価方法 (合計100%)	授業への参加態度、アンサンブル力、協調性などを考慮し、評価する。		
失格条件	なし		
予習・復讐の準備 学習などのアドバイス	オーケストラスタディ、スコアリーディング等を事前の準備を充分に行っておく。		
課題へのフィード バック	実技、実習の取り組みに対して個別にコメントします。		
教科書	不使用		
著者名			
出版社			
参考書			
その他			
備考			
科目生への開講	なし		

1

2

3

4

5

6

7

8

9

10

